

宮澤賢治における「修羅」の意識

——大正七年をめぐって——

はじめに

宮澤賢治は「修羅」という言葉をたびたび用いた。賢治が残した詩集は三冊あるが、大正十三年に刊行した『春と修羅』（大正13・4・20、関根書店）をはじめとし、『春と修羅』第二集、第三集（二作とも生前未刊行）と、『春と修羅』という題名にこだわり続けた。一般的に用いられる修羅は「阿修羅・阿修羅道」を略した仏教用語である。衆生が業により赴く六道の一つで、この六つの迷いの世界に四つの悟りの世界を加えた十界の一つでもある。『例文仏教語大辞典』によると「嫉妬・猜疑から起る争い。また、長い闘争、戦争、激しい怒り、情念などの喩え^①」とされる。しかし賢治が用いた修羅という言葉は、原子朗氏が『（新）宮澤賢治語彙辞典』の中で、「一般的解説と同列には並べられず、はみ出すものをもってい

る。（略）今後の賢治研究の、おそらくはてしない課題の一角が「修羅」の問題であると言えよう。」と述べるなど、その多義的な用いられ方から定義付けや作中での使われ方に関して現在まで多くの研究がなされてきた。

修羅はいつ頃から用いられるようになったのか。言葉自体の初出は大正九年六月から七月頃友人保阪嘉内宛書簡の中である。

書簡¹⁶⁵ 六月～七月 保阪嘉内あて

私は殆んど狂人にもなりさうなこの発作を機械的にその本当の名称で呼び出し手を合せます。人間の世界の修羅の成仏。そして悦びにみちて頁を操ります^②。本当にしつかりやませうよ。かなしみはちからに、欲^ほりはいつくしみに、いかりは智慧にみちびかるべし。

小野隆祥氏は『宮澤賢治の思索と信仰』で「人間の世界の修羅の成

仏」は、小林一郎が『日蓮主義講話』（大5・10・28、大同館書店）の「即身成仏」の節で「此の三千の凡てが吾々の一念の中に具はつてゐるので、仏となるも此の心であるし、地獄を作るも此の心である。（略）而も三身即一で、一を離れて他のもの、存在すべき様もないのであるが、吾々の凡夫の心にも此の三如是は具わつてゐる」と「日蓮の三如是」を説いた箇所を応用したものであると主張する。^③ 修羅は大正九年の段階では仏教に結びついている。

修羅は何を意味するのか。多義的に用いられる修羅を明確に定義することは困難であるが、本稿では大きく分けて三つの意味合いを持つものと考えたい。まず「阿修羅・阿修羅道」の意味を持つ仏教的な使われ方である。ここには「雨ニモマケズ」手帳メモ書きの「汝が五蘊の修羅／を化して或は天或は／菩薩或は仏の国土たらしめよ」や、大正九年書簡での「人間の世界の修羅の成仏」が当てはまる。二つ目は賢治の心象を言い換えた自己認識としての修羅である。詩「春と修羅」の「おれはひとりの修羅なのだ」などが該当する。三つ目は現実世界や自分自身が存在する空間を修羅と呼ぶ場合である。詩「無声慟哭」の「わたくしが青ぐらい修羅をあるいてゐるとき」などがこれに該当する。修羅という言葉は現れずとも、共通する意識は特に現実世界への視点の中に見出すことができる。梅原猛氏は「地獄の思想 日本精神の一系譜」で、「人間ばかりか、

すべての生きとし生けるものは、すべて殺し合いの世界、修羅の世界に生きている」ことを賢治の現実世界に対する根本直感であるとし、「よだかの星」を例に賢治がこの修羅の世界に悲しみや絶望を抱いているとした。^④

修羅として賢治が描いたものは仏教的な意味合い、自己認識、殺戮の世界から始まる。しかし、後に殺し合いの世界をただ眺める傍観者的な視線に自己を介在させた際、修羅に対して新たな視線が生じている。賢治は「自分が生きていること」と「自己の存在によって他の生命が奪われること」という生の両義性の中で苦しんだ人物である。「よだかの星」「なめとこ山の熊」「ビジテリアン大祭」などをはじめとする作品でこの苦悩は語られ、賢治作品の一つのテーマとなつている。修羅に対し賢治は生涯同じ関わり方をしては生じては、修羅を克服しようとする新たな視線が後の作品では生じているのだ。

修羅という言葉の初出は大正九年でありそれ以降の作品には修羅の意識が確認できるが、その意識の一端は大正九年以前には見られないのか。本稿では修羅という言葉が現れる以前の修羅意識の一端を探るために、賢治が童話制作を開始したと推定される大正七年に遡り、賢治の作品や書簡に着目したい。大正七年に注目するのは、まず大正七年成立とされる童話「蜘蛛となめくちと狸」、短歌「青

びとのながれ」の世界観にある。「蜘蛛となめくちと狸」は賢治の童話一作目とされる作品である。ここでは何の躊躇いもなく命を奪い合い「地獄行きのマラソン競走」をする蜘蛛、なめくち、狸の姿が描かれる。さらに「青びとのながれ」と題する一連の短歌では生と死が未分化の異様な世界が描かれる。どちらも生の両義性に苦しむ姿を描いた後の作品からは程遠い残酷な世界が展開されている。

次に、これらの作品が書かれた大正七年という年にも注目すべき点がある。『新』校本宮澤賢治全集の「年譜篇」によると、大正七年は、夏に「蜘蛛となめくちと狸」「双子の星」などの童話創作が開始されたことが推定されると共に、二月には法華行者として生きる決意を固め、六月には賢治の生命を奪う結核の始まりとなる肋膜炎を発症している。その中でも注目したいのは二月から七月にかけて行われた徴兵をめぐる父との書簡のやりとりである。父の説得で一度は研究生として盛岡高等農林学校に残ることを決め、その二週間後にはやはり徴兵検査を受ける決意をしたものの、最終的には検査で兵役が免除されているのである。後に自分の生が他の命を奪うことに苦悩するほど他者の生を見つめ続けた賢治が、なぜ命を奪うことに直結する戦争に進んで参加することを決めたのか。徴兵検査は賢治に何をもたらしたのか、そこに修羅の意識の一端は見られないのか。

本稿では、第一章で短歌「青びとのながれ」、第二章で童話「蜘蛛となめくちと狸」における生と死の描かれ方に着目し、修羅の意識を見出したい。第三章では徴兵忌避をめぐる書簡から大正七年における賢治の現実世界への認識を探り、「蜘蛛となめくちと狸」や「青びとのながれ」に共通する意識を発見したい。

一 短歌「青びとのながれ」における修羅意識

賢治の文学活動の始まりは短歌であり、大正七年にも六十五首の短歌を残している。その中でも「歌稿A」の「大正七年五月以降」に分類され、「青びとのながれ」と名付けられた十首に注目したい。

青びとのながれ

680 あ、こはこれいづちの河のけしきぞや人と死びととむれなが
れたり

681 青じろき流れのなかを死人ながれ人々長きうでもて泳げり

682 青じろきながれのなかにひとびとはながきかひなをうごかす

うごかす

683 うしろなるひとは青うでさしのべて前行くものあしをつか

めり

684 潮れ行く人のいかりは青黒き霧とながれて人を灼くなり

685 あるときは青きうでもてむしりあふ流れのなかの青き亡者ら

686 青人のひとりにはやく死人のたゞよへるせなをはみつくり

687 肩せなか喰みつくされししにびとのよみがへり来ていかりなげし

688 青じろく流る、川のその岸にうちあげられし死人のむれ

689 あたまのみひとをはなれてはぎしりし白きながれをよぎり行くなり

盛岡高等農林学校時代の友人保阪嘉内へ宛てた大正七年十月一日付けの書簡にも「青びとのながれ」と同様の世界が記されている。

私の世界に黒い河が速にながれ、沢山の死人と青い生きた人とがながれを下って行きます。(略) 流れる人が私かどうかはまだよくわかりませんがとにかくそのとほりに感じます。

この書簡では「青びとのながれ」の中で賢治は自分の心象風景を記したことを語っている。また、「沢山の死人と青い生きた人」と述べているように「青びとのながれ」では、生と死に大きな差異をつけず、両者が混在し一つの現象として存在する様子が描かれている。「青びとのながれ」の執筆にあたって想定された川はあるのか。賢治の弟清六氏は『兄のトランク』の「修羅の渚」にて以下のように述べている。

この川岸が百万年も前には細長い入海の渚で、或時には鹹湖

宮澤賢治における「修羅」の意識

になったり、また湿原になったりしたことは賢治の「イギリス海岸」という作品に、かなり詳しく書かれている。全くそれはその通りだろうと思うのだが、太古に渚であったところは各地に沢山あった筈で、ここを特に「修羅の渚」と賢治が呼んだのはどういうわけかという疑問を私は持っていた。

その疑問については、この場所が何かの理由で太古から永い間、沢山の動物たちが集まった所で、その動物たちが殺しあったり食われたり、争闘しあった渚だろうという意味かと一応は考えていたのであった。⁵⁾

「修羅の渚」という表現が見られるのは歌曲「イギリス海岸の歌」の中である。

「イギリス海岸の歌」

Tertiary the younger Tertiary the younger

Tertiary the younger Mud-stone

あをじろ日破れ あをじろ日破れ

あをじろ日破れに おれのかげ

Tertiary the younger Tertiary the younger

Tertiary the younger Mud-stone

なみはあをさめ 支流はそそぎ

たしかにここは修羅のなごさ

「あをじろ」や「あをじろ日破れに おれのかげ」のように「あをじろ」いものの中に自己を見出す描写は「青びとのながれ」や書簡の表現と共通する。さらに、清六氏は同書の「イギリス海岸」への「独白」で賢治が晩年に制作した文語詩「ながれたり」にも言及する。

また文語詩には我々の先行人類の悲しみを歌ったと思われる

「ながれたり」という詩もある。その一節には、

ながれたりげにながれたり

川水軽くかがやきて

ただ速やかにながれたり

(そもこれはいづちの川のけしきぞも

人と屍と群れながれたり)

ああ流れたり流れたり

水いろなせる屍と

人とをのせて水いろの

水ははてなく流れたり

というように書かれている。私たちは賢治の生前にイギリス海

岸に沢山の死人が流れて行く夢のようななをしをたびたび聞いたし、賢治の画いた「修羅の渚」を沢山の死人が流れている大きな墨絵があつて、相当な力作であつたがすぐ破棄されたという^⑥ことも知っている。

「青びとのながれ」を元に文語詩「ながれたり」が執筆されたことは、「そもこれはいづちの川のけしきぞも／人と屍と群れながれたり」と680番歌「あ、こはこれいづちの河のけしきぞや人と死びととむれながれたり」が合致する表現であることから明白である。^⑦清六氏が賢治から聞いたという「イギリス海岸に沢山の死人が流れて行く夢のようななし」も「青びとのながれ」の世界観と一致する。「青びとのながれ」で人と死びとが流れている場所はイギリス海岸ではないか。大正十二年に執筆された「イギリス海岸」にも着目したい。「イギリス海岸」は、賢治が花巻農学校時代に生徒を連れて北上川の河岸を訪れた様子を描いた作品である。

イギリス海岸には、青白い凝灰質の泥岩が、川に沿ってずるぶん広く露出し、その南のはじめに立ちますと、北のはづれに居る人は、小指の先よりもっと小さく見えました。

殊にその泥岩層は、川の水の増すたんび、奇麗に洗はれるものですから、何とも云へず青白くさっぱりしてゐました。(略) 日が強く照るときは岩は乾いてまっ白に見え、たて横に走った

ひゞ割れもあり、大きな帽子を冠ってその上をうつむいて歩くなら、影法師は黒く落ちましたし、全くもうイギリスあたりの白亜の海岸を歩いてゐるやうな気がするのです。(略)それ
に実際そこを海岸と呼ぶことは、無法なことではなかったのです。なぜならそこは第三紀と呼ばれる地質時代の終り頃、たしかにたびたび海の渚だったからです。

これらは賢治の空想の世界によるものであるが、共に散策していた生徒が岩に「何かの足跡」を見つけたことから、賢治は「空想よりもっと変なあしあと」が出たとして、足跡を「第三紀偶蹄類の足跡標本」と名づけその採取を試みる様子を語る。清六氏が「太古から永い間、沢山の動物たちが集まった所で、その動物たちが殺しあつたり食われたり、争闘しあつた渚」と評した通り、イギリス海岸には地質時代に遡ると太古からの化石が堆積しており、多くの死の上に現在がある。そこでは今もなお生命活動が行われており、生と死が混在している。これは「青びとのながれ」の生者と死者が混在し川を流れていく様子と一致する。賢治がイギリス海岸を「海の渚」「修羅のなぎさ」と呼び想定した修羅とは、地質時代からの争闘の上に現在の生が混在する「命が奪い奪われてきた」世界を指し、

「青びとのながれ」でも同様のものが描かれているのではないか。
また、689 番歌「あたまのみひとをはなれてはぎしりし白きながれ

宮澤賢治における「修羅」の意識

をよぎり行くなり」と詩集『春と修羅』中、「春と修羅」の「四月の気層のひかりの底を／唾し はぎしりゆききする／おれはひとりの修羅なのだ」を比較したい。「白きながれ」が「四月の気層のひかりの底」に、「はぎしり」「よぎり行くなり」が「唾し はぎしりゆききする」に対応しており、両者とも「ながれるもの」の中に漂い、はぎしりしながら「明るい方向」へ向かっていく。689 番歌は推敲の跡が見られる歌であるが、初稿では「あたまのみわれをはなれて」と「よぎりゆきもの」が「われ」であることが記されている。

「青びとのながれ」の修羅意識は空間認識であり「春と修羅」のように自己を修羅とする段階まで至っていないが、「ながれるもの」に自己を見出す視点は共通している。「青びとのながれ」には「春と修羅」にもつながる世界が描かれているのではないか。

以上のように、短歌「青びとのながれ」は「イギリス海岸」と通底する風景を想定して詠まれ、生と死が混在した世界観、「春と修羅」につながる表現が見られる点からも修羅が描かれた作品と考えられる。

二 「蜘蛛となめくぢと狸」における修羅意識

「蜘蛛となめくぢと狸」は賢治の弟清六氏の証言によると、大正七年夏、賢治自ら家人に読み聞かせた童話の第一作とされる作品で

ある。後に「寓話 山猫学校を卒業した三人」（大正十三年頃）を経て、「寓話 洞熊学校を卒業した三人」と改作され、さらに部分的改作の後「ずるいなめくちのはなし」となる。「蜘蛛となめくちと狸」には大正十年成立説も存在するが大正七年成立と考えるべきである。^⑤

本作は他者を騙して食べ、地位の高さに固執する蜘蛛、親切だと評判であるが頼ってくる相手を食べるなめくち、山猫大明神を奉ずる似非宗教家で救いを求めるものを食べてしまう狸が、互いに妬み競争し、最後には破滅する物語である。この作品は、資本主義の競争社会に対する批判や風刺を主題とする見方が多くなされてきた。

小沢俊郎氏の「人と比べなければ価値が決まらないような資本主義社会の優勝劣敗弱肉強食の価値観の否定」^⑥や、向川幹雄氏の「宗教家や名声欲・金銭欲にとりつかれた人々を揶揄することをテーマとした作品」^⑩という論である。また秋枝美保氏は、生きるために食べ物を得ようとする彼らの行為を「困っている者が大量に発生する不安と不況の時代に盛況となるサービス産業の発生をイメージしている」と主張する。三氏が本作の主題を「競争世界の批判」とする根拠は、「人と比べなければ価値が決まらない」姿や「名声欲・金銭欲にとりつかれた人々の揶揄」、「サービス産業の発生」という競争原理にある。

蜘蛛の社会的地位や権力に固執する姿、三匹の生存競争を越えて私利私欲のために弱者を食べようとし、お互いを貶し争う姿は人間の競争社会を投影し、悪行の限りを尽くした者が死という破滅を迎える結末は、強い者が支配する社会の転覆を凶つたようにも捉えられる。しかし、押野武志氏が「作品の背後にそのようなモラルを持ち出すには、筋はあまりにも単純で、むしろ、荒唐無稽な死に様の生々しさに素直に感動すべきだろう。」と述べるように、本作はモラルや教訓よりも「殺し合いの世界」に重点が置かれ、生と死が同列に語られる修羅そのものが描かれた作品であると考えられる。本章では、死の描かれ方から「青びとのながれ」と共通する修羅意識を見出し、改作後の「寓話 洞熊学校を卒業した三人」と本作とで修羅意識が変化しているのかという点について考えていきたい。

(一) 死の描かれ方について

「蜘蛛となめくちと狸」では、蜘蛛となめくちと狸の他にも蚊、かげろふ、かたつむり、とかげ、兎、狼など実に多くの生き物が死を遂げる。これらの死の描写は一貫して因果律が抜け落ち、理不尽である。蜘蛛は狸にからかわれて悔しくなり網を一生懸命かけるが、その描写から一転、「ところが困ったことは腐敗したのです。食物がずんずんたまって、腐敗したのです。そして蜘蛛の夫婦と子供に

それがうつりました。そこで四人は足のさきからだんだん腐れてべとべとになり、ある日たうたう雨に流れてしまひました。」と読者に同情の隙を与えず、非常に客観的に死んでいく様子が表現される。冒頭でも、「蜘蛛と、銀色のなめくちとそれから顔を洗つたことのない狸とはみんな立派な選手でした。けれども、一体何の選手だったのか私はよく分かりません。(略)一体何の競争をしてゐたのでせう」という疑問が投げかけられ、「けれどもとにかく三人とも死にました。」という事実が突然告げられる。「けれどもとにかく」や「さて」の多用により、死が重要視されず事実確認のみがなされる。

さらに三人が「地獄行きのマラソン競走」の「立派な選手」だったことが最後に知らされるが、なぜ死ななければならなかつたのかは明らかにされない。理不尽で因果律の抜け落ちた死の描写は「殺し合いの世界」という状況を一層際立たせる。このような描写には死へのリアルな実感がなく、生と死が同列の現象として語られる。これは、「青びとのながれ」の生者と死者が同じ空間を流れ、生きることも死ぬこともそれほど差異はなく描かれている様子と一致する。終わりのない死という描写も、「青びとのながれ」の死してもなお苦しみ続ける死者たちの様子と重なる。なめくちがとかけを嘗めて食べようとする場面とかけはからだ半分とけても喋り続け、狸に食べられた兎や狼も狸の腹の中で喋り続ける。身体は無くなつ

ても魂は身体という主体から離れて消えずに残り、彷徨いつづける。作中ではほぼすべての登場人物が死を遂げる。彼らは生存競争だけではなく、腐敗や熱病であつという間に死んでしまふ。死が意味づけられる前に命を落とす描写は、押野氏が述べるように荒唐無稽であり、滑稽でさえある。罪を明確化しない「蜘蛛となめくちと狸」にモラルという主題はあてはまらない。悪者が罰せられるという勸善懲惡の物語ではなく、ただ命を奪ひ合う世界への認識である修羅そのものが描かれた作品と読みとれる。

(二) 「寓話 洞熊学校を卒業した三人」との比較

競争社会への風刺は「蜘蛛となめくちと狸」よりも改作後の「洞熊学校を卒業した三人」に現れている。「洞熊学校を卒業した三人」では「うさぎと亀のかけくら」や「大きいものがいちばん立派」であることを洞熊先生が教え、一番になるため皆が競争することにより、物語序盤から競争目的が明確である。さらに、蜘蛛の「いまに虫けら会の会長になつてきつときさまにおじぎをさせて見るぞ」や、なめくちの「こんどはきつと虫けら院の名譽議員になつてくもが何か云つたときふうと息だけつけて返事してやらう」からは立身出世に対する執着が見られる。殺し合いの描写は前作から大きく変化しないが、最も変化が見られるのは、章ごとに挿入される眼の碧い蜂

たちの幸せな生活描写である。他者の生に目を向けずただ命を奪っていく蜘蛛やなめくちや狸とは異なり、蜂は「蜜や香料」を貰う際に花に挨拶をし、お礼に他の花へ「花粉」を運ぶ。堅実に幸せな生活を送る蜂との対比により、三匹の生存競争を越えて命を奪い合う罪や悲惨な最期を辿る理由が明確になる。さらに、理不尽に殺し合う世界のみを描いた前作とは違い、蜂の行動からは自らの生につながる他者への視線が窺える。生の両義性に苦悩する段階には至っていないが、修羅の克服への視線が現れ始めている。以上のように、「洞熊学校を卒業した三人」は競争目的や罪の明確化により展開の不条理性が前作よりも弱まっている。さらに、殺し合いの修羅の世界そのものを描いた前作と異なり、「蜂」の描写により、他者へ目を向け修羅と対抗する世界が展開される。

「蜘蛛となめくちと狸」では競争社会への批判には留まらない世界が展開されていた。生存競争とは言え命を奪うことに躊躇がなく自らの欲望のままに他者を食べる三人の行為は痛快ささえ感じられ、命を奪わなければならない苦悩や葛藤がない。「蜘蛛となめくちと狸」も「青びとのながれ」と同様に賢治が後に苦悩し葛藤することになった命が奪い奪われる、修羅そのものが描かれているのではないか。

三 徴兵忌避をめぐる書簡における修羅意識の変化

賢治が「青びとのながれ」や「蜘蛛となめくちの狸」を著した大正七年前後ほどのような世界情勢であったのか。大正三年に第一次世界大戦が起こり、大正六年にはソビエト政府が樹立、日本は大正七年にシベリア出兵を宣言する。四月五日には日英陸戦隊がウラジオストクに上陸、八月二日には日本軍がシベリアに出兵し、三日からは米騒動が起こる。国内外で緊張が走る状況を賢治はどのように捉えていたのか。シベリア出兵や米騒動などの社会情勢に直接言及することはないが、大正七年には、学業や生活の状況報告だった父親への書簡の中で徴兵の問題が触れられはじめ。父親や友人宛てた書簡から徴兵に対する賢治の考えを考察したい。

まず、二月一日に父親に宛てた書簡である。徴兵検査の延期を提案する父に、賢治は次のように反論する。

書簡43 二月一日 宮沢政次郎あて

一、小生の只今の信するところにより
一、父上の御勧めに従ひ万一却て戦死等の事有之候とき誠に御互に不本意なるにより

一、御心配を更に来年に延す事御申し訳けなきにより、
一、就れにせよ今後の方針を早く定めたまきにより、

一、若し首尾よく除隊し得るときは直ちに來々年より自由に幾分たりとも御役に立ち得るにより、

一、小生の今年検査を受くるならひて本年の検査を恐れざる友人等あるにより申し候

徴兵検査を受ける理由として、「自分のことは自分で決定したい」「父の勧めに従つて戦死した場合お互いに不本意である」「気がかりなことはやく済ませておきたい」「友人への影響」などを挙げている。

菊池邦作『徴兵忌避の研究』によると、大正七年は徴兵忌避が全面的に非合法化された時代で、合法的忌避の手段として、学生の徴兵延期、海外渡航（脱出）があり、その他特殊なケースとして六週間現役兵と一年志願兵の二つの制度があった。当時在学中の者は卒業迄検査を延期でき、入営を猶予してもらえた。賢治はこの年満二十二歳で盛岡高等農林学校卒業の年であったが研究生として残るなら二年は徴兵検査を延期できたのである。^⑧

次の書簡では戦争や戦争で死ぬことへの考えが記されている。

書簡46 二月二十三日 宮沢政次郎あて

（略）戦争とか病気とか学校も家も山も雪もみな均しき一心の現象に御座候 その戦争に行きて人を殺すと云ふ事も殺す者も殺さる、者も皆等しく法性に御座候（略）（先日も屠殺場に参

りて見申し候）、牛が頭を割られ咽喉を切られて苦しみ候へどもこの牛は元来少しも悩みなく喜びなく又輝き又消え全く不可思議なる様の事感じ申し候 それが別段に何の役にたつかは存じ申さず候へども只然くのみ思はれ候）

ここでは、戦争を病氣や学校などと同列のものとし、一つの出来事として捉えている。そして、戦争で殺し殺されることを「法性」とし、戦場における人間の死と並列して人間が牛を殺すことを述べている。牛の命を奪うことへの罪悪感や悲劇性がない描写は、命を奪うことに躊躇しない「蜘蛛となめくぢと狸」、生と死が混在する「青びとのながれ」に通ずる。また、三月十日の書簡48には「戦争は人口過剰の結果その調節として常に起るものに御座候」とあり戦争を自然淘汰の一部として捉える戦争観が見られる。

以上の書簡からは、戦争を概念的に捉え現実の問題として真摯に向き合っていない賢治の戦争観が読みとれる。書簡43「万一却て戦死等」という文面からは、戦争で命を落とすことを自分の問題として考えていない様子が窺える。さらに、保阪嘉内に宛てた書簡では次のように述べている。

書簡49 三月十四日前後 保阪嘉内あて

春が来たら私は兵隊靴をはいて歩ける位歩きまはり稼げる位稼いでこのかなしみをかくさうと思つてみました。春は来りました

があなたは今ごろはやぶれかぶれで怒つてゐるでせう。私はまたあなたが静かに笑ふとも考へる。私ならばさうした。退学も戦死もなんだ。みんな自分の中の現象ではないか。保阪嘉内もシベリアもみんな自分ではないか

大正七年二月に保阪は、賢治たちと編集発行した同人雑誌「アザリア」五号の中で発表した文章が危険思想を持つものと学校側に判断され、除籍処分を受ける。賢治は戦争も天皇制も否定せず「退学も戦死も自分の中の現象」だと、現実の事象を心の中の現象であると言いつつ切っている。当時の賢治の現実世界に対する認識の未熟さが窺える記述である。しかし、徴兵検査で「第二乙種」となり徴兵が免除されたことでこれらの考えは変化する。

書簡63 五月十九日 保阪嘉内あて

扱てその後御互に予期しない様に立場が向いて来ました。あなたは勿論、私もこの間の兵隊検査で第二乙種になりました。(略) 初め軍医は第一乙種にしたさうですが例のラツバを私の胸にあて、から「君は心臓が弱いね。」と申しました。「さあどうですか。」と云つてゐるうちに軍医は向ふに向いてしまひました。心臓が弱いかどうか私もしりません。けれども人並に山が歩けるのを見るとそんな弱いでもない様です。私はしかしこの間、からだが無暗に軽く又ひっそりした様に思ひます。

(略) 私は春から生物のからだを食ふのをやめました。けれども先日「社会」と「連絡」を「とる」おまじなゑにまぐろのさしみを数枚たべました。(略) 食はれるさかながもし私のうしろに居て見てゐたら何と思ふでせうか。(略) 又屠殺場の紅く染まった床の上を豚がひきずられて全身あかく血がつかました。転倒した豚の瞳にこの血がバツとあかくはなやかにうつるのでせう。忽然として死がいたり、豚は暗い、しびれのする様な軽さを感じやがてあらたなるかなしいけだものを生を得ました。

これらを食べる人とても何とて幸福でありませうや。

書簡63からは、賢治が菜食主義生活を開始したこととそれに伴う葛藤が窺える。社会と連絡をとるおまじないとしてまぐろのさしみを一枚食べ、まずそうに食べている自分を見てさかなほどのように考えるかなどと、菜食主義を試みる一方で他の命を奪うという矛盾した行為を行つている。さらに、屠殺場で豚が殺される記述と書簡46の人間が牛を殺す描写を比較したい。牛に悩みや喜びがなく殺すことに悲劇性がない書簡46よりも、書簡63は死に至る過程がより鮮明に豚の視点から描かれる。豚が命を奪われることで「あらたなるかなしいけだもの生を得」て、「これらを食べる人とても何とて幸福でありませうや。」という部分は、豚の死がその豚を食べる人間の生になることを表し、生の両義性の片鱗が見える。また、社会

と連絡をとるおまじないとしてまぐろのさしみを食べたという箇所は「ビジテリアン大祭」の「もしたくさんのいのちの為に、どうしても一つのいのちが入用なときは、仕方ないから泣きながらでも食べていい」という生の両義性の克服を試みる一つの打開策へと発展する部分である。後に賢治作品のテーマとなる視点がここで形成され始めている。

徴兵忌避は賢治にとって生と死に対する新たな眼差しを持つ契機を与え^④、その新たな価値観は賢治を菜食主義へと向かわせる一つの要因となったのではないか。また、当時の戦争や病氣、退学など全てを一つの現象と捉えてしまう賢治の未熟さが「蜘蛛となめくちと狸」や「青びとのながれ」といった修羅そのものを描く作品を生み出し、その一方で徴兵忌避によって得た生と死への眼差しが生々の両義性への苦悩とその克服という修羅への新たな価値観を芽生えさせたのである。

おわりに

本稿では、大正九年を初出とする「修羅」が、言葉自体は現れずとも、大正七年成立の「蜘蛛となめくちと狸」「青びとのながれ」の中に現実世界を命が奪い奪われる世界とする認識として表されていることを分析した。また、「よだかの星」などのように修羅への

克服は未だ作中に反映されていないが、修羅の世界における生の両義性に苦悩し、克服しようとする視線は芽生え始めていることが書簡から窺えた。大正七年という年は、童話や短歌の中で修羅意識が描かれ、徴兵忌避をめぐる生々の両義性へとつながる新たな視線を獲得した、賢治の文学活動における一つの節目と位置づけられる。

注

- ① 石田琢磨著『例文仏教語大辞典』（平9・3・1、小学館）
- ② 原子朗『新・宮澤賢治語彙辞典』（平9・7・26、東京書籍）
- ③ 小野隆祥『宮澤賢治の思索と信仰』第二部・宮澤賢治の思索——修羅の自覚と刹那滅の克服、一一五頁～一二二頁（昭54・12・15、泰流社）
- ④ 梅原猛『地獄の思想 日本精神の一系譜』第十章・修羅の世界を超えて、一九二頁～二〇〇頁（昭42・6・26、中央公論社）
- ⑤ 宮沢清六『兄のトランク』第二章・「修羅の渚」にて、一四八頁～一五四頁（平3・12・4、筑摩書房）
- ⑥ 注⑤に同じ。第二章・「イギリス海岸」への独白、一五五頁～一六六頁（平3・12・4、筑摩書房）
- ⑦ 小沢俊郎『青びとのながれ』考——「銀河鉄道の夜」の陰画として——（『京都教育大学国文学会誌』13―9、平10・3）にも指摘がある。
- ⑧ 『新』校本宮澤賢治全集では、「この夏に、私は兄から童話「蜘蛛となめくちと狸」と「双子の星」を読んで聞かされたことをその口調まではっきりおぼえている」という弟清六氏の証言（四二年版全集『研究』「兄賢治の生涯」二四七頁）を大正七年説の可能性として述べている。また、井上寿彦氏は『賢治、「赤い鳥」への挑戦』（平17・9・25、

青柿堂)の中で、中学時代から盛んに行われていた短歌制作が大正七年になって激減していることから新たな文学活動として童話創作が選ばれたこと、大正七年から大正九年の期間に書かれた作品は大正七年に鈴木三重吉によって創刊された童話童謡雑誌「赤い鳥」を意識して書かれた可能性があることなどを示唆し、「蜘蛛となめくちと狸」を大正七年成立とする根拠としている。

- ⑨ 小沢俊郎「蜘蛛となめくちと狸の話」から——「洞熊学校を卒業した三人」へ(「四次元」16——3、昭39・3)
- ⑩ 向川幹雄「蜘蛛となめくちと狸」論(「言語表現研究」15、平11・3)
- ⑪ 秋枝美保「シニカルな文明批評「蜘蛛となめくちと狸」(「国文学解釈と鑑賞」74—6、平21・6)
- ⑫ 押野武志『宮澤賢治の美学』第二章・ナンセンスへの回路 1 他者認識の分岐点——「蜘蛛となめくちと狸」と「張紅倫」——、七四頁—八三頁(平12・5・20、翰林書房)
- ⑬ 菊池邦作『徴兵忌避の研究』第二章・徴兵忌避の歴史、一一〇頁—三八〇頁(昭52・6・15、立風書房)
- ⑭ 吉本隆明氏は『宮澤賢治 近代日本詩人選13』(平1・7・30、筑摩書房)で、書簡63の魚が人間に喰べられるとき、それを魚の方から見ていという視角を「日蓮の生まれかわり観」をまねた賢治童話固有の方法であると述べている。また、中村晋吾氏は「徴兵忌避としての宮澤賢治——徴兵検査とその周辺——」(「国文学研究」160、平22・3)の中で、書簡63の魚は「兵士となって戦死する可能性をもつ兵士たち」の声で魚の形の形を表現したものとし、徴兵検査により賢治童話に不可欠な「現実の「死」をはじめとする具体的な苦しみに対する想像力」が生まれたとする。両者とも賢治が新たな視角を徴兵検査の後得たことを主張して

いる。

「付記」本稿で引用した宮澤賢治の文章は『新』校本宮澤賢治全集』全十六巻・別巻一(平8・3・25—平21・3・10、筑摩書房)を底本とした。引用に際しては、ルビを簡略化し、漢字は原則として新字体に改めた。／は改行を表す。